

---

fatexx3 **第三次聖杯戦争**

度会

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

f a t e x x 3 第三次聖杯戦争

### 【Nコード】

N 3 9 5 1 Y

### 【作者名】

度会

### 【あらすじ】

f a t e / z e r o を見ていてなぜか第三次を妄想してしまいました。

p i x i v でも書いてます。一応。

## プロローグ(前書き)

二次創作なんで、そういう風なものに嫌悪を感じる人はご遠慮下さい。

## プロローグ

最初に断っておく。

この聖杯戦争において勝者はただの一人も存在しない。

「聖杯戦争 それは六十年おきに繰り返される七人のマスターと七人のサーヴァントの殺し合いである」

彼女たちは屋敷を出る前に先代に手渡された手紙の一文を思わず口に出して読んでいた。

「意味が分かりますか？姉さん」

「勿論あなたよりはね」

ふふ。

と彼女たちはお互いを見て笑った。

傍から見ている人間にはさぞ不思議な光景に見えることであろう。

彼女たちは笑いながらお互いを貶しあっているのだ。

もっともフィンランドのこの街に住む人間にとっては日常茶飯事の光景であり、誰も気にするものなど存在しないのだが。

『エーデルフェルトの双子姉妹』

仇名でもなく二人はそう言われていた。

双子と言われても方や姉は髪は茶色く緩めに巻いてあり、勝ち気そうな目が特徴的だった。

そしてもう片方の妹はというと、色素は薄く、目も少し眠たそうに目じりが下がっていた。

姉に言わせると『神様はどちらが優勢な遺伝子を受け継いでいるのか理解していたから私の方が素晴らし  
く生まれてきたのよ』ということらしかった。

妹はそんな姉を見ても、ただの頭の可哀想な人と憐憫の眼差しを向けるだけであった。

そんな彼女たちなのだが、肩書きはエーデルフェルト家の当主なのである。

二人も当主がいる。

その事實は、エーデルフェルト家は二人でようやく一人前の存在なのだと他の魔術師は陰で揶揄している  
ことを彼女たちは知っていた。

そしてその噂を聞くたびに彼女たちは笑うのであった。

「そういえば、姉さん。この間また私たちが半人前だから当主を二人立てるしかなかったと噂されている  
のを聞いてしまいましたわ」

「あら、その方は可哀想なお方ですね」

彼女たちはまた顔を見合わせて笑った。

エーデルフェルト家が二人も当主を立てたのはそんなちっぽけな理由などではなかったのだ。

この二人は仲が悪かったのだ。

いや、仲が悪いという言葉を彼女たちに当てはめるのは無粋といえよう。

例によって先代、つまり二人の父親が当主をどちらかに決めようとする<sup>1</sup>と決まっ<sup>2</sup>てどちらかが不平を言い出す。

口だけなら可愛いものだが、彼女たちは実力行使に出るのだ。

このままでは、内紛でエーデルフェルト家が崩壊してしまう。

そう危惧した先代がし<sup>3</sup>うがなく二人に当主の座を与えてとりあえず二人を立てたのだ<sup>4</sup>った。

「ねえ、姉さん」

「なに？妹？」

「私ね、聖杯が欲しいわ」

「あら、奇遇。珍しく意見があったわね」

「姉さんもなんですか？やっぱり双子ですね。気が合います。では、一時休戦ということぞ」

どちらも微笑みを崩さない。

「妹。それは名案ね」

それじゃ、と姉は小指を差し出す。

妹も意図を理解したのか小指を組む。

「なんだか私達仲良い姉妹みたいですね」

そうね。と姉は答えると二人してフィンランドを旅立つ。

聖杯を得るために。

## プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

反響あってもなくてもがんばります。



## プロローグ ?

半年前

彼女は冬木市にいた。

と言っでもどこからか越してきたわけではない。

ただ帰って来たのだ。

この忌まわしき土地に。

彼女はポケットから一枚の写真を取り出して少し微笑んだ。

そこに映る少女は彼女の妹だった。

ここに戻ってくる前に母方の家に預けてきたのだ。

大切だから。

もし自分になにかあっても無事に育って欲しいから。

妹への情は置いてきたはずの彼女だが、写真を見ると、幾分か気持ち  
ちが落ち着いた。

彼女は数年前にここを出たきり久々の帰郷となるわけだが、街並み  
が変わっていないことに驚いてい  
る。

そして、彼女は自らの生家辿りつく。

「この家は変わらないな……」

自然とそんな言葉が口をつく。

街並みよりも変わっていない。

まるでここだけ時間が止まっているようだ。

いつまでも妄執に取り付かれた家。

彼女は自分の家、屋敷に対してそう悪態を吐くと扉に手をかけた。

ガチャリと古めかしい音を立てて扉が開く。

屋敷の中にいた家政婦の何名かは彼女の姿に気づき声をかけようとしたが、彼女はそれを意に介さず目的の部屋へと歩を進める。

流石は勝手知ったる自らの家。

迷うことなく目的の部屋の前に着く。

その扉を開けようとした時体の中で何かが動くのを感じた。

久しぶりの感覚だ。

自分の中で得体のしれない何かが動いている。

そんな懐かしの感覚に苦笑しながら彼女は扉を開け放った。

部屋の中は電気は愚か光がどこからも入らない文字通り暗闇に包まれていた。

「久しぶりだな。臧硯」

彼女が暗闇に向かってそう叫ぶと暗闇がその声に反応するように動く。

「久しぶりじゃの。巳苑<sup>ミン</sup>」

彼女、巳苑は臧硯の声を聞くと嫌悪感をあらわにした。

「どういう風の吹きまわしかの？てつきり貴様は死んだと思っていたのにの」

カラカラと笑いながら一人の老人が姿を現した。

齢いくつになるだろうか。

巳苑には見当もつかない。

ただ、一つだけ言えるのは、臧硯は私が生まれてからずっと老いても若返ってもいないことだけだった。

そして戸籍上の、あくまで戸籍上の巳苑の父親だ。

巳苑は黙って右手に宿った三画の紋章を臧硯に見せる。

臧硯は、そのその紋章を見ると、ニヤリと口を歪めた。

「なるほど……どおりで、あいつには宿らないはずだ」

「アイツ？」

巳苑は臧硯の言葉に眉ひそめた。

臧硯の話によると巳苑を見離して分家の魔術的素養が高い人間に徹底的に英才教育を施したそうだ。

勿論、学問などではなく、蟲に慣れるための訓練だ。

なるほど、確かに分家の人間ならば特に問題はないだろう。

要は適正の問題だ。

最初の御三家は聖杯戦争の参加資格を得ることが優先的に認められているのだが、全く選ばれる気配がなく不審に思っていたらしい。

「それで、その人は？」

巳苑は大して興味を惹かれたわけでもなく、ただの話の話を速く進める為に適当に相槌を打つ。

「それが、蟲に食べさせてしまったわい」

カラカラカラと臧硯は笑った。

巳苑はその声、表情、態度など臓硯の全てが嫌いだっただ。

幼い頃から修行と称した徹底的な蟲の凌辱。

苦痛しか残らなかった。

幸いと言うのか不幸と言うのか予想以上のスピードで蟲との調整が  
終わった。

その事実が臓硯を喜ばせたのが腹立たしい。

しかし、おかげで今の自分があるというのも皮肉な話だった。

巳苑の力を持ってしても臓硯の蟲を全て殺すことは出来ない。

死んでるモノを殺せと言っているようなものであった。

今この屋敷を全て焼けば臓硯は死ぬだろうか？

巳苑の頭の中にふとそんな考えが浮かんだが、すぐにかぶりを振ってその考えを打ち消す。

だめだ。

その程度で何とかなるんだっただら最初から魔術回路が宿った時点で殺している。

巳苑はそう心の中で毒づく。

腐っても魔術師。

いや腐っているから魔術師とでも言っべきか。

何度この体に流れるを血を恨んだことだろう。

まあ、いい。

それも今回で終わる。

「そういえば、あのいつも貴様の後ろについてきていた餓鬼が見えぬようじゃが？」

臓硯はそう言うと、私の後ろを見るような素振りを見せる。

餓鬼……か……。

コイツはきつと、妹の美鈴の名前なんて一度も聞いたことがないだろう。

魔術的素養がない人間はただの餌か。

「美鈴は……死んだ」

「嘘じゃな」

巳苑の嘘を臓硯は即座に否定した。

そして、例の薄気味悪いカラカラと声を出して笑った。

「貴様が、あの餓鬼を見殺しにしておいてそこまで平然としていられるわけではあるまい。それに貴様の嘘を見破るなど造作もないことじゃ」

巳苑は臓硯に気づかれないように歯噛みする。

「臓硯。アンタの望みって不老不死だったか」

巳苑の問いに臓硯は左様。と答えた。

「人間一人の寿命だけでは根源の渦に至るには短すぎるのである。そう臆面もなく言い切る臓硯を巳苑はキツと見据える。

確かに昔は、遠い昔、それこそ目の前にいるこの群体が人間であった頃の悲願はそうだったのかもしれない。

しかし、巳苑には今の臓硯にそんな望みは無いと考える。

死にたくない。

その妄執に取り憑く妖怪にしか見えなかった。

「私の望みはね……」

アンタを殺すことだよ、臓硯。

こいつさえいなくなれば、あの蟲達を使って何かをするといつこと、ひいては間桐の家から魔術という

モノから解放されるかもしれない。

そうすれば、美鈴をこんな目にあわせなくて済む。

「カカツ。中々不穏なことを考えていそうじやの巳苑」

臓硯はそう言うと、巳苑に背を向けた。

「貴様には、まだ利用価値がある。長旅で疲れたじやろつ。どこかの部屋で休んでおれ」

そう言つて臓硯はまた暗闇に包まれた部屋の中に溶けていった。

巳苑は昔自分の使っていた部屋の扉を開けた。

そこは家を出ていった時と変わらぬままだった。

長年使っていたベッドに横たわる。

暫く使っていないかったせいか埃が舞った。

巳苑は趣ろに自らの手を天井に伸ばした。

「久々に出てきなよ蟲共」

巳苑の声が合図となったのか、挙げられた巳苑の腕の方に向かって何かか巳苑の体の中を進んでいるかのように皮膚が盛り上がる。

そこから這い出た蟲は、大小様々でまた形状も一つ一つ変わってい



た。

ヴヴヴとうざったいような羽音を立てる蟲もいれば、地面にベタリと貼りついたままの蟲もいる。

彼らは蟲であって虫ではない。

全て自然界に存在する昆虫とは遠くかけ離れた存在だ。

「この蟲共を体に入れて早二十年余り……そらこいつらも私を認めるわけだ」

元々、魔術の才能を色濃く受け継いでいた巳苑の体は蟲達にとってはまさに御馳走のようなものであり、いくら蟲に知能がないとはいえ、長年付き合えば共生という関係が生まれるのも自明の理である。

おかげで彼女が蟲を行使する際に感じる痛みや悪寒などはほぼ、存在しなかった。

蟲たちは私の言うことを理解してくれる数少ない生命体だ。

「もし……この蟲達を例えば一年やそこらで制御しようとするならば、それこそ地獄を見なきゃならんだろうね」

でも、そんな考えは杞憂か。

そう考えて巳苑は被りを振った。

「だってこの醜い聖杯戦争は、私の代で終わるんだからね。だから、他のマスターってのには悪いけど死んで貰う」

闘いに犠牲はつきものだ。

そっだよ。と妹の顔を思い出し、笑顔で虚空にそう問いかけると  
已苑は規則正しい寝息を立て始めた。

## プロローグ ? (前書き)

こんばんは。

見て下さってくれる方には損をさせないよう頑張ります。

## プロローグ ?

三か月前

イギリスのとある屋敷の中では軽快な鼻唄が聞こえていた。

その鼻唄の主は、上機嫌なのを隠すこともなく、すれ違う使用人達にも笑顔を振りまいていた。

鼻唄が似合うと言っては本人に失礼かもしれないが、鼻唄と着ている赤黒いドレスが良く似合っていた。

そして、その鼻唄の主は歩みを止める。

「あら、お姉さま、これからどこかへ行かれるのですか？」

お姉さまと呼ばれた女は感情を込めることなく、仕事と言いつつ放った。

「私の所の仕事も、それから姉さんの所もこれから忙しくなるから、メールには構ってやれないのよ」

ごめんね。と姉は彼女、メールの頭を一撫でするとせわしなく足早にその場を去った。

メールは姉達の仕事の詳しい内容を知ることが出来なかったが、恐らく軍需関係の仕事なのだろうと当たりをつけていた。

このご時世に忙しくなる職業など数えるほどしかないからだ。

メイルは機嫌のいい理由である自分の右手を見た。

そこには幾何学的に描かれた三画の模様が浮かんでいる。

それは即ち聖杯に選ばれたという証明に他ならなかった。

この令呪が刻まれたのは今朝のことで、何か鈍痛がすると思い手を出してみるとこの令呪が刻まれていたのだ。

「60年に一度行われるこの度の戦争。我が名門アメジスト家がい  
ただくとするわ」

アメジスト家は5代続いた魔術の家系であり、父は時計塔に勤めて  
いた経験を持つ魔術師会では名の知られた家系だった。

メイルの上には二人の姉がいるが、どちらも少しは魔術を嗜んだが  
やがて使い道を見いだせずそれぞれ魔術師ではなく他の職業に就  
いていた。

この代で魔術師としての血は途絶えるのかと父親は危惧していたが、  
三女であるメイルは父親の才能を受け継いだのか魔術の才があつた。  
得意とする魔術は、『先読み』。中国武術などでは相手の呼吸を読  
んで次の一手を読むらしいが、メイルはそれを対魔術師に改良した  
ものである。

メイルの眼は相手魔術師が魔術を使う瞬間に、相手の体のどこの部  
位に魔力が集中しているのかを見定め

ることが出来た。

「幸いなことに、この聖杯戦争にぴったりのサーヴァントを呼ぶ触媒は揃ってるのよね」

メイルが上機嫌な理由は令呪を得ただけだからではなかった。

このアメジスト家にはメイルが生まれる前からこの家にある秘宝と呼ぶのにふさわしいものが存在していたのである。

そうまさに聖遺物と呼ぶのに相応しいシリアで見つけた秘宝をメイルは触媒として使用する腹積もりであった。

「さて、それはそうと、冬木に行く準備をしなくちゃね。あれはどこかしら……」

メイルは意気揚々とスーツケースに荷物を積む。

作りモノの聖杯を持ちかえるために。

## プロローグ ? (後書き)

何かあれば遠慮なくお願いします。

## プロローグ ?

一カ月前

「どうにも、お前さんは神さまに愛されてるのかねえ」

「そんなことないよ、ばあさん。ただ単純に運でもあっただけさ」

寂れていると言っても差支えない村の中でそこまで大きくもない家の中で男と老婆が話をしていた。

老婆の方は細く力を込めてしまえば折れてしまいそうな位であった。

それに比べて男の方は日本男児にしては背が高くがっしりとした時代が時代なら武蔵坊弁慶に並ぶかと言うほどの巨躯だった。

男は、自分の荒れた指を眺める。

徴兵されてからというものの海に出ることはあっても魚を捕ったりすることは無くなってしまったな。と  
自らが積み上げた経験が無に帰るような気持ちにして少し哀しくなった。

男は漁師だった。

父の背中を追って海に出た。

そして二十歳になる頃にはこの村周辺でもその名前を響かせるほど



の名手になっていた。

「もう俺が魚を捕ることはないのかもな」

目の前の老婆に聞こえることなく男は呟いた。

男は荒れた指から視線を自らの手の甲に移す。

そこにはいつ出来たか分からない傷があった。

擦っても取れないのだから刺青に近いものがある。

男の名前は権藤統一と言った。

彼は本来聖杯戦争とは全く無縁の人間であった。

恐らく彼は自分にこの刺青が宿るまで聖杯戦争のせの字も知らなかったことに違いない。

統一の背中には首から尻にかけて大きな刺青があった。

これは勿論統一自身が入れたものではない。

まるで人体の血管と神経を模したような模様。

その刺青に理由についてはこの村では伝説にもなっていた。

まだ、統一が、少年だった頃、と言ってももう船にも乗っていた時のある日のこと。

彼の乗っていた船が嵐に見舞われ難破した。

当然統二も投げ出されて、体は海深くに沈んでいった。

そろそろ息も持たなくなってきたここまでかと統二が人生を諦めた瞬間。

海の底に光る社を見つけた。

統二はその光が気になり、最後の力を振り絞ってその光に触れた。

目を覚ました統二が気づくと浜辺に打ち上げられていた。

しかし、立ち上がる気力すらなくただ倒れていた所を村人に一人が発見して偶然にも助かったのだった。

統二は持ち前の体力で暫く寝ると快復したのだが、背中に大きな傷が出来ており、その傷だけだいつまでも色濃く残っていた。

それが現在の刺青なのだ。

統二がその話を村の長老達にすると、長老たちは口を合わせてこの村に古くから伝わる水神の加護だと言った。

加護を受けてからというもの、背中 of 刺青に精神を集中させると普段持つことが出来ないような重い物

を持ち上げたり、速く動くことが出来るようになった。

その力を行使する度に背中が熱くなるのを感じた。

そして、右手に謎の刺青が宿る前の晩奇妙な夢を見たのだ。

海の水神と名乗る昔話によく出てくる精霊のような風貌をした老人が統一の前に現れたのだ。

『お前はまもなく聖杯にマスターとして呼び出されるだろう。その時お前に授けた魔術回路がきつと役に立つだろう』

『お言葉ですが水神殿。聖杯戦争とはなんでしょうか……』

統一がそう質問すると老人はにこやかに笑い、統一はまた光に包まれる。

光に触れた瞬間統一は全てを理解していた。

聖杯戦争、マスター、サーヴァント、そして魔術師と呼ばれる存在がいること、そして己の体に宿った

背中への刺青の意味を。

そして全てを理解した上で統一はその老人に向き直った。

『水神殿あなたは何を望むのですか？』

『そうさのお……またこの水神信仰を蘇らせて欲しいかの』

欲のない神様だ。統一は素直にそう思った。

恐らくその願いもこの神にとってどうでもいいようなことだろうという印象を受けた。

『承知しました。あなたに助けいただいたこの命あなたの為に使いましょう』

統一がそう言うと、急に目が覚めた。

夢だったのか。

それにしては随分とリアルな夢だった。

統一は寝床の横に古びた木片があるのに気がつく。

それを手に取ってみる。

統一の船に使われている材木ではなかった。

それにこの木片が俺が落としたものにしては、古すぎる。

その木片はほぼ崩れかかっているともすれば霧散してしまいそうだった。

ただ、この使い道もないゴミ同然の木片を何故か統一は捨てることが出来なかった。

「もしかしたら、水神殿が私の為に触媒でも置いていつてくれたの

かもしれないな」

統一は自分の夢のような妄想に少し笑みを漏らして、手ぬぐい  
の木片をそつと包むと、机の中にそつとしまった。

## 第三次聖杯戦争開幕

360:00:00

「少しいいですか？神父？」

遠坂幹継は静かに聖堂教会の扉をノックした。

「もうそろそろ聖杯戦争が始まるのに中立的立場である監督役の下に訪れてよろしいんですか？」

今回聖堂教会に派遣された神父、言峰璃正はそう厳かに言う。

「別に知り合いの所に訪れて何が悪いのだろうか？」

そう言うと、幹継は持ってきた自前のワインを璃正に向かって見せる。

その酒を見て、璃正はならば仕方がないな。と幹継を教会の中に招いた。

「他のマスターの情報はどうなっている？」

部屋に入って開口一番幹継はいきなり核心を尋ねた。

ふむ。璃正はこめかみ辺りをコンコンと叩く。

「今、申告されているマスターは一人。権藤統一だけです。どうやら彼は魔術師ではないそうですが」

璃正の言葉に幹継が噴き出す。

「まさか、この誉高き聖杯戦争という場において魔術師にもなれない一般人がなんと二人も。どうやら聖杯は遂にこの遠坂に跪くのか」

これは傑作だ。

幹継は上機嫌にワインを飲み干す。

「そうですね。私には魔術のことは理解しかねるのでそのようなことは分からないのですが。もう一人の方権藤統二という人間ですが……」

そこで璃正は言い籠った。

「どうかしたのか璃正？その権藤という人間は何かあるのか？」

「いえ……ただ、魔術の素養もなく、師事したこともない人間という申告でしたのでその通りに書き記しておりましたが、素人考えでも少し疑問点があります」

「どづいつことだ？」

「はい。考えてもみて下さい。聖杯が何も魔を操る術を持たぬ人間を選ぶのでしょうか？」

「ふむ……」

幹継は少し考えるような素振りを見せていたが、やがて考えるのを

止めた。

「例えどのような人間でもこの遠坂の敵ではないさ」

そう言うと両手を大仰に開く。

その余裕こそが遠坂家の家訓であるらしいが、その余裕が足を引っ張らなければいいのだが……

「時に、璃正。霊器盤に何か反応は無いのか？」

霊器盤とは専任司祭に与えられる英霊のクラスを判別する測定器のようなものである。

これにかかれば、マスターは判別出来ずとも既に現界しているサーヴァントは分かるはずである。

「そうですね……今現界しているのは……」

そこで璃正の言葉が止まる。

それを不審に思ったのか幹継も霊器盤を覗いてみた。

すると、二つの光が所々重なっている様子が見えている。

「これはどういうことだ……璃正？」

「どうやら……器械の故障かもしれません。しかし、この反応はバーサーカーで間違いないかと……」



璃正にしては珍しく齒切れの悪い回答だ。幹継は旧友の珍しい反応に目を丸くしていた。

「しかし…バーサーカーか」

どの程度の英霊を狂化させたかによるが分からないが、マスター次第では非常に厄介だ。

「まあ、全てはこの遠坂の前に跪くものだからな」

教会の中に幹継の笑い声が響いていた。

350:45:40

「いよいよか……」

アインツベルン城の片隅で彼女はそう呟いた。

魔術師達がこの冬木の街に集まってきているのを感じる。

今晚にでも七人のマスターとサーヴァントが集まって聖杯戦争が始まるのであろう。

彼女、ケルベスフィール・フォン・アインツベルンは、失敗作である。

体に欠損はなく、むしろ作られたと聞けば納得してしまうような容姿に赤い目が印象的な彼女は重ねて言

うが失敗作である。

全く、失敗作と言われた身にもなっただけなのだが。

恐らくアインツベルンからしたら、せつかく作ったのだから勿体ない。程度の考えで私をマスターに指名したのだろう。

失敗作というのも、あの人達からしたら失敗なのであって、当人としてはなんら不自由もない。

私には感情があった。

本来アインツベルンは聖杯戦争を行うマスターに感情など不要。

と考えているらしく第三次聖杯戦争のマスターはロボットのように感情を無くし魔術回路を詰めこむという試みのもと造られたらしい。

らしいというのはケルベはそう聞いていただけだからだ。

人間までとは言わないが、それなりの感情を持ち合わせており、泣いたり笑ったりすることが出来てしま

う。  
それを失敗だと決めつけたアハト翁などは一度たりともケルベに会おうともしなかった。

「全く酷いやつだよな。なんだっけその……」

「アインツベルン」

「そうそうアインツンとかって奴ら。作るだけ作って失敗したらポイかよ」

暗闇から男の相槌が聞こえる。

「まあ、アインツベルンってのはそういう家系だからしょうがないわよ」

ケルベは半ば分かっているような諦めたような心情を吐露する。

「俺のマスターにしては随分とまあ湿気てるなあ……」

お前もそう思うだろ？と何かを叩いているようだがケルベからは何も判別がつかなかった。

「それで私はあなたをなんて呼べばいいのかしら？」

「そうだな……」

暗闇の中の彼は考えているようだった。

「シンプルに復讐者 アヴェンジャー でいいんじゃないか？」

「そう、ならアヴェンジャー。聖杯でも取ってアインツベルンの連中でも見返しますか」

そう言ってケルベは身近にあった本を一冊取ると宙に投げる。

突如としてケルベの髪がふわりと揺れる。

暗闇から光が二つチカツチカツと見えた。

次の瞬間分厚いハードカバーの本が真つ二つになりそれぞれが壁に突き刺さった。

本に刺さっていたナイフは二つが二つとも禍々しい形をしていた。

### 第三次聖杯戦争開幕？

彼女が本を投げたのと同時刻に権藤統二は砂浜の上にいた。

「なるほど。全ては神のお告げか」

儀式とやらに必要なものはとりあえず調達しておいた。

あとは夢で見た通りのことを行えば問題はないだろう。

「あー。閉じよ。みたせ。閉じよ。みたせ。閉じよ。みたせ。  
閉じよ。みたせ。閉じよ。みたせ。」

せ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する。

素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバインオー  
グ。降り立つ風には壁を「

遡ること三十分前。

間桐已苑は間桐家の蟲蔵で召喚の魔法陣を準備している途中だった。

「相変わらず、汚い場所だな」

こんな機会さえなければ二度と入りたくない。

それに臓硯と一緒にいるのが更に已苑を不快にさせた。

「術の詠唱もなにもかも問題ない。だから出ていってくれないか？」  
巳苑が悪意を込めた視線を臓硯に送るが、本人はどこ吹く風のようにカラカラと嗤った。

「冗談を言うな巳苑。こんな面白いもの滅多見れるものではないのだぞ」

そう言っただけでどこかに行く様子も見えなかったため、巳苑は深くため息を吐いて儀式に集中することにした。

「  
」

彼女は願う英霊に聖杯に、この御身に流れる血の根絶を。

「まったくこんなぎりぎりに私達の住まいが出来るなんて私達ずいぶん災難ですわね。姉さん」

「そうね。あなたが私のセンスを疑うから余計に時間がかかってしまったわ」

「そうなんですよね。まさか姉さんが私のセンスを理解してくださらないから驚いてしまいました」

かの双子も冬木の街にいた。

彼女達は他のマスターの候補達よりも先にこの街で拠点となる住処を作っていた。

名前は『双子館』

その名が示す通り屋敷に左右対称に二つ家が繋がっているカタチである。

見た目こそ同じだが、お互いがお互いのセンスを受け入れられないために内装は完全別物である。

「さて、そろそろ私、サーヴァントを呼び出さなければならぬのだけれど？」

「妹。それは私の役目よ？なんて言っただって当主はこの私のみなのだから」

「可哀想に。未熟な自分の論理の中でしか生きることが出来ないみたいね。ならこうしましょう。二人で儀式を行いましょう」

「二人で？」

儀式を行えるほど魔力が溜まっている場所はこの館には一つしか存在しなかった。

新に探すほど悠長なことは言ってもらえない。

「はい。もしかしたら違うクラスのサーヴァントが同時に現れるかもしれませんよ？」

「そうしたらいきなりあなたを殺せるのね？妹」

「はい。私が姉さんを殺すことができます」

笑みを崩すことのない彼女達は二人して双子館のメインホールに現れた。

「」  
「」

二人はゆっくりと詠唱を始める。

何を望む？

全てを。

英霊に。

聖杯を手に入れるため。

「」  
「」  
告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の  
寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ 「」  
「」



巳苑の中の蟲が珍しく活発に術者の体の中を這いずる。

滅多に消費しない量の魔力を消費しているからであろう。

しかし、今の巳苑にはその痛みすらも快感に感じられた。

「 誓いを此処ここに。 我は常世総ての善と成る者、 我は常世総ての悪を敷しく者 」

巳苑は途中で妹の顔を浮かべる。

もうすぐ終わるから妹には全うな道を生きてもらいたい。

それだけが悲願だった。

物事には犠牲がつきものだ。

6人のマスターとサーヴァントの命で足りなければ自らも差し出さう。

メイルの詠唱も最終段階に入っていた。

聖遺物はこの戦争の命題である聖杯である。

聖杯の名前を冠すほどの英霊はそういない。

いずれにしても『彼』を召喚出来れば勝てないわけがない。

メイルはそう踏んでいた。

「汝三大の言霊を纏まとう七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

最後の一節まで言い切るとメイルはようやく一息ついた。

全ての詠唱は終わった。

後は聖杯の仕事だ。

彼らの願いは無事英霊と呼ばれる者達に通じ、各々の魔法陣の中には人影が現れる。

遙か時代を超え、数百年、数千年あるいはこの世ではない世界から招かれた存在。

魔法陣が時々雷を帯びてバチツと白く光る。

辺りに民家があったらボヤ騒ぎと通報されるくらいの煙だった。

その現象の一つ一つが召喚された英霊の凄まじさを物語っている。

そして、あまねく場所で召喚されたサーヴァントという名の英霊達は一様に自分の眼前にいる人間に問う。

「問おう、汝が私のマスターか？」

## 閉幕 ？（前書き）

少しでも目を通してくれる方々がいて下さるので嬉しい限りです。

開幕？

「あはは」

メイルは誰に向けてでもなく笑った。

どうやら召喚は委細なく成功したらしい。

「問う。あなたは俺のマスターか？」

魔法陣の中には赤い鎧に身を包んだ騎士がいた。

女性の中でも平均的な身長の枠を出ないメイルはその騎士を見上げる形になる。

やはり英霊、とりわけ聖杯を依代とただけあって対峙しているだけでビリビリと何かを感じた。

「ええ、私はアメジスト・メイル。あなたのマスターよ」

メイルがそう言うと、赤い騎士はなるほど。と頷いた。

マスターが目の前にいる人物だと分かり、少し気を抜いたのだろうか。

感じるプレッシャーみたいなものが幾分か和らいだ。

「いや、まさか聖杯戦争って戦争があるなんてね。随分と豪気な名前をつけたものだよ」

赤の騎士は自分の言葉に納得するように頷く。

どうも、メイルが抱いていた人物像と少しかけ離れていた。

そこで不安になったメイルは赤の騎士に問うた。

「あなたの名前は　ね？」

すると、赤の騎士はおう。と頷く。

「いかにも、俺は聖杯の騎士と呼ばれている。この度の戦ではランサーのクラスで現界している」

「あなたランサーなの？」

「そうだな。きっと俺よりも相応しい奴がいたんだろうさ」

なんせ世界は広いからね。とランサーは肩を竦めた。

メイルは契約したマスターとしてランサーのパラメータを眺める。

普通。と言っでは悪いが、聖杯を依代として現界したのならもう少しパラメータが高くてもいいだろう。

それこそ特例で全てのパラメータがAになってもいい位なのにとメイルは毒気づく。

「まあまあ、相手さんだって伊達に神話に生きてたりしないんだから、流石にそこは補正かからなかった」

んでしょっよ」

全く随分気楽なランサーである。

それにしても幸運Aというのはランサーにしては珍しい気がする。

ランサーは三騎士として数えられ、抗魔力などのスキルが付与されるが、どうにも不運と呼ばれ過去二回の聖杯戦争においても例外なく幸運はEランクだったはずだ。

「まあ、運も大事な要素よね」

もしかしたら、EのスキルをAまで変えたことが聖杯なりの精一杯の加護だったのかもしれない。

「とりあえず帰ろうかしら。ランサー霊体化して付いてきて」

あいよ。とランサーは軽い返事をする、スウッと自らの肉体を霊体に変えて姿を消した。

メールが構えた本陣は召喚した場所からそう離れていない郊外にあった。

魔術的には不利かもしれないが、日本に興味があったメールはその不利を飲みこんでまでこの日本的な家屋にしたのだ。

「ほう。意外に日本的な所に住んでいるのな」

「そうよ。丁度空き家になってたみたいだから勝手に使わせてもら

うことにしたの」

そう言うと、メイルは得意そつに薄い胸を張った。

「俺も欧州の方だから、こういう家屋は初めてだが、どうしてこの国の人間はここまであけっぴるげなんだ」

メイル達はその家屋の中を何かないか搜索していた。

部屋のほぼ全ては草で編まれた畳というものが敷かれており、木の匂いが心地よかった。

「まあ、マスター。なんかあったら知らせてくれ。俺はこの畳で寝てる」

「なっ……」

メイルは一瞬なんの冗談かと思ったが、ランサーは本当に実体化したまま畳に横になって寝息を立て始めた。

実体化するために必要な魔力もメイル自身が供給しているのになんて自由な。

と一瞬激情に駆られたが、自分はマスターなのだと言呟を見て思い出し、かろつじて溜飲を下げた。

「ふう」



一時間ほどこの屋敷を搜索してみたが特に収穫はなく、前の持ち主も暫く使っていないかったということしか分からなかった。

メイルはとぼとぼとランサーの寝ている部屋の扉を開けた。

まだ、ランサーは寝ていた。

スーと規則正しい寝息をたてている。

メイルはそれがどうしようもなく我慢出来ずにランサーの体を蹴ろうと足を振りあげ

「え？」

その振りあげた足はランサーの体に届くことはなかった。

気がつくとメイルの体は宙を舞い一瞬の内にランサーによって地面に叩き伏せられていた。

メイルの顔の真横にはいつの間に取り出したのか槍が刺さっていた。

「ん？ああ、なんだマスターか」

ようやく目を覚ましたのかランサーは自分が組み倒した相手をようやく視認したらしい。

「いや、どうも寝ている時に敵意ってのを感じちまうとつい反射的にな」

悪い悪いとランサーはメイルの上からどいた。

「な、なかなかやるじゃないランサー」

プライドが高いメイルはびっくりして軽く漏れたなど口が裂けても  
言えなかった。

開幕？

340:30:21

「よつと」

朝七時、統二は久々に漁を行っていた。

全く久々すぎてつい気合いが入ってしまう。

統二は釣りあげた魚を慣れた手つきで船の甲板に投げる。

船はこの街に来る時に乗ってきた物で、そこまで良い船ではないが、最低限のモノは揃っていたのでこうして海の方に出てみたのだ。

「流石だな」

「まあ、餓鬼の頃からやってるからな」

現在小舟に乗っているのは統二を含めて二人。

いや正確を期すならば、マスター一人とサーヴァント一人だった。

「しかし、触媒があんなものでこと足りるとはな」

一段落したので統二はサーヴァントの方を向く。

「ああ、あの木片は我が最高の船アルジェリアンの船体の一部だ。

私にとってはそれをあんたが持っていたことが驚きだ」

統一の前の女性は頷く。

「これは水神殿に貰ったのだ」

「水神？ああ、あんたの背中にけつたいな刻印を彫り込んだやつか」

そうだ。と統一は答えた。

最初にこいつが召喚された時に思わずその目つきに圧倒された。

鷹のように鋭い目。

瘦身というのに相応しい体躯に統一に並ぶほどの背丈。

もしこの時代にいたら間違いなく惚れていただろう。と統一は少し場違いな考えを抱いた。

「この赤髭と呼ばれた海賊王を呼び出すとは、中々目が高い。この聖杯戦争の覇権は私達の手に収まったも同然だ」

「きつとそう言う奴ばかりが呼び出されてるんだろうな。えっと…」

「ハイレディン。呼びづらかったらライダーと呼んでもいい」

要は私が私と認識出来る名前と呼んでくれれば全く問題ない。ライ

ダーはそう言った。

ライダーは話ながらも着々と甲板に増える魚をじっと見る。

「こう言っちゃ悪いが、あんたは漁師のままの方が良かったんじゃないか？」

その言葉に、ハハと、統二は苦笑する。

「全くそうは思うが、一度死んだ身だ。恩人に報いるのが日本人として筋じゃないか」

「いや、私は日本人じゃねえし、そういう美学っていうのか分からないがそういうのは持ち合わせじゃない」

「そうか、流石海賊王だな」

統二はそう言って笑うと、突然竿を仕舞い始めた。

「どうした？」

「なに。そろそろ取り過ぎだ。魚も生き物だが、海つても生き物だ。何事もほどほどがいいんだよ」

「あんたがその水神とやらに愛されてるのが分かったわ……」

そうか？と統二は手早く釣った魚を仕舞って冬木の街に戻った。

「これからどうする？手っ取り早くそこら辺の奴ら殺すか？」

ライダーはにこやかにそんなことを言う。

馬鹿を言うな。と統一がそれを窘めた。

「こういう闘いは先に自分の能力がバレた奴が負けていくんだよ。特にアンタなんて前に出たら一発でバシるだろうが」

統一の意見が意外と的を得ていたようで、ライダーは、なるほど、そういうことか…と納得したように頷いた。

「しかしだな……機を見つければすぐに攻める」

要は漁と同じだ。

統一はそう言って空を見上げる。

これから起きる戦争のことなど知らないというような青空であった。

「そっぴゃさ、アンタって何か聖杯に願うことってあるのかい？」

統一の問いにライダーは勿論と答えた。

「当たり前だ。じゃなきゃあなたなんか召喚ってか呼びだされる義理はない。私の望みはね、全世界に

「

「なるほど全世界の海を支配すると」

「まだ言っていないんだが？」

「違うのか？」

「変わらないさとライダーは口を尖らせて言う。

「俺は、その願いこそが俺とアンタを引き寄せたと考えている。俺の願いも似たようなものだ」

なに？ライダーはそれを聞くと途端に興味が湧いたのか統一に向かって好奇の視線を投げかける。

「ほう。ならば、二人でこの戦いが終わった後、侵略戦争でもけしかけるか？」

「そうだな。そこまで出来たら上等だな」

統一は浅瀬になってきたので船から降り、自らの手で船を押す。

「……あのさあ」

「なんだライダー」

「ここって、もし狙撃されるなら一番されやすいよな。とか思った」

その言葉に統一はぎょっとして辺りを見回す。

迂闊だった。

もう自分はそついう世界にいるのだという認識がまだなかった。

もし、今狙撃されていたら、なんの願いも果たすこともなく幕を閉じるところであった。

「ライダー。恩に着る」

「なに。さっきからスコープ越しに誰かに見られている気配がしてね」

そつ言うとライダーはある一点を見つめる。

釣られて統二もそちらを見るが、特に何かを視認出来たというわけではなかった。

「気配が消えたか……。逃げられたな」

まあ、いい。とライダーは浜辺に腰を下ろす。

「すぐに事は起こる。気長に待つとしようか」

そつ言うと、ライダーは砂浜に寝転び空を見つめた。



開幕？

339:40:32

「チツ」

ガブリイル・アダモフは地面に向かって唾を吐く。

油断していた。

流石は英霊と言ったところか。

かなり離れていた距離から見ていたはずなのに気付かれた。

マスターの方には全く気付かれていなかった。これは早々に決まるかと思っただがどうも上手くいかないものだ。

「まあ、簡単に決まっちゃってそれはそれでも悲しいものだな」

アダモフはポケットからドロップを取り出し口に含むとガリガリと噛み砕きながら食べた。

アダモフの風貌はこの時期の冬木においてはそれなりに目を惹くのだろう。

たまにすれ違う人々の視線を感じる。

しかし、アダモフはその視線を一切気にすることなく歩き続ける。

「全ては、ツァーリの勝利の為だ……」

誰に言うのでもなくそう呟くと、アダモフは古びた家屋の中に足を踏み入れた。

中も外と変わらず最低限の生活を過ごす程度の機能しか持っていないようだ。

「ツァーリ。やはりこの闘い一筋縄ではいかないようです」

アダモフが恭しく頭を下げたその先には大柄な男性がいた。

正確にはツァーリだったという表現が正しい。

彼は、自分で作ったのかこの古ぼけた家屋にそぐわぬ豪華な椅子に座ってアダモフを見下ろしていた。

「そうかそうか。分かった。御苦労だった」

彼はおもむろに椅子を離れると外を見るように窓に目をやった。

「この冬木という地まだ見知らぬ土地ではあるが、どうにも持っている魔力が他の街に比べて幾分か高い

ようだ。これなら工房を2、3個作ることも造作ない」

クククと笑いを噛み殺したような声を上げた。

「しかし、ツァーリがキャスターのようなクラスで召喚されるとは

思ってもみなかったです」

アダモフがそう言うと、キャスターは口を歪めた。

「どうにも、他のクラスも埋まっておつたし、一応僕は一時期魔術の類に興味を持ったことがあつてな」

あれは余りにも短い期間だったから史実を読んでも出てこないだろうな。とキャスターは答えた。

「それは、我が先祖代々に伝わる書物に書かれておりました。『我がツァーリ イヴァン4世は死刑にした人間の体を使って新しい人間を精製する術などを一部に人間に研究させ、自ら使用してオプリーチ二ナに活用したと』」

アダモフの言葉を聞くとキャスターは物凄く愉快そうにハハハと声を出して笑った。

「そうか。アダモフ。貴様は僕の部下であったアイツの子孫にあたるのか。言われてみればなるほど確かに目つきと体つきは似ているな」

恐縮です。とアダモフは頭を下げた。

「しかし、ツァーリ。時代は進化しました。私はあなたの傍にいた時の我が先祖よりも格段に強くなりました」

そう言うとアダモフは肩にかけている銃をキャスターに見せる。

「ほう……儂の時代に比べて格段に性能が上がってそうだな」

関心したようにキャスターは銃を眺めた。

「これさえあれば、ツアーリの手を煩わせることすらありません」

「ふむ……」

キャスターは何かを考えるように顎に手を置いていたが、やがてアダモフを見据えた。

「アダモフよ。貴様はマスターだけ狙え」

「と仰いますと?」

「ふむ。まず第一にこれは貴様も知っているだろうが、儂らサーヴアントは大抵の攻撃は効かぬ。それに当たったとしても大した効果は得られない。それに比べてマスターはただの人間。銃弾一発で仕留められる」

「なるほど……」

「第二に、といっても、これが主たる理由なのだが……。お前が倒してしまつては儂が殺せないじゃないか」

キャスターは豪快に笑つと霊体化して姿を消した。

開幕？

320:00:53

「ふう……」

幹継は召喚が成功したことに安堵してため息を吐いた。

結果は上々だ。

あのレベルの英霊を呼べるマスターなど他にはいないだろう。

召喚した幹継でさえ狡いと呼べる位に強力なのである。

これなら、妻と子も家に置いておいても構わなかったかもしれない。

「アーチャー」

幹継がそう呼ぶと、突然幹継の眼前に巨躯が現れた。

おおよそ人間と呼ぶには大きすぎる、実在した人物とは到底思えない。

さながら、お伽話に出てくるような巨人であった。

「いかなされたかマスター」

その巨人は恭しく頭を垂れる。

普通の人間であればこれほどの巨人を意のままという事実だけで昂

ぶっつてしまっただろう。

しかし、遠坂幹継という男は眉根一つ動かさなかった。

幹継は仮にどのような英霊であれ、マスターとサーヴァントなのであり特別な感情を抱く必要もないと感じていた。

「この屋敷の周辺に不審な奴はいたのか？」

「委細な……」

く。とアーチャーが呟こうとした瞬間に屋敷全体が大きく揺れた。

「ふむ。何者かが早速訪れたようだな」

出るぞアーチャー。そう言うとき幹継は庭先を見に行くような様子で椅子を立つ。

「宝石及びその他の準備は十全だ。この遠坂の敷地内で戦うことを後悔するがいい」

幹継が庭先に出ると、そこには黒い何かがあった。

アーチャーに比べれば小人のような体躯である。

顔まで伺い知ることが出来ないがゆらゆらと揺れ、腕が体の割に長い印象を受けた。

「マスターあれはいかほどのサーヴァントでしょうか？」

アーチャーは実体化すると、隣にいた幹継に問う。

「ふむ……そこまで強くなさそうだ」

一応能力を読んだが幹継にはどうにもこのアーチャーが負けるほどの能力はないと感じた。

「アーチャー。私は後ろでマスターからの攻撃に備える。お前はサーヴァントとして戦え」

幹継は一步下がると辺りに気を配り始めた。

敵対するサーヴァントは恐らくバーサーカー。

霊器盤のエラーを引き起こした存在で間違いないだろう。

それもアインツベルンか間桐のどちらかのサーヴァントに違いない。

これは幹継の勘ではあるがこの早い時期に攻めてくるマスターは間違いなく冬木の地理に詳しいはずだからである。

幹継は辺りに気を配りながらも、目の前で起きている闘いからも目を離さなかった。

「ふっ！」

アーチャーにしては珍しく剣のようなものでバーサーカーに襲いかかる。

ような物というのは明確な形容が難しいのだ。

剣だと思ったら、別の何かに変化する。

とにかく掴みどころのない得物だ。

幹継は自分のサーヴァントの宝具の特異性を見て驚く。

向こうは武器の様なものを持っている気配はない。

「最高の展開はこのまま決着か……」

ここで決まってしまうか。そうであれば随分と呆気ない幕引きだ。

勿論幹継も言葉には出しているがそんなことは微塵も思っていないかった。

「ッ!!!」

アーチャーの得物は手ごたえを感じることはなかった。

避けられた。

逃がした敵の気配を探ろうと辺りに意識を張り巡らせる。

しかし、意識を張り巡らせる必要もなかったのだ。

いる。

先ほどの場所に敵は間違いなくいた。



同じように揺れている。

不穏な空気を感じたアーチャーは剣を矢に変えてソレを打つ。

放たれた矢は寸分違うことなく突き刺さる。

そのはずだった。

「む？」

確かにゆらゆらと揺れていた敵サーヴァントは消えた。

気配も感じられない。

「やったのかアーチャー？」

幹継からの問いにアーチャーは判然としないような表情で恐らくと答える。

「マスターが言うように奴がバーサーカーでしたら間違いないと殺すことが出来ました」

「随分と奥歯にものが引つかかる言い方だな」

「僭越ながら。マスターも不思議に思いませんか？バーサーカーにしてはこちらに攻撃を加えることもなくただ立っているということなど」

ふむ。顎に手を当てながら幹継は思索する。

「確かに、一理あるな。まあ今夜は侵入者を撃退出来たのだからそれで良しとしようじゃないか」

アーチャー、外の監視を頼むと言い残すと、幹継は屋敷の中に入っ  
ていった。

## 開幕 ？（後書き）

整合性と、面白さの両立を目指して頑張ります。

閉幕 ？（前書き）

少しでも面白いと思っていただけるように頑張ります。

## 開幕？

319:55:35

アーチャーが追ってくる気配がない。

どうやら逃げられたようだ。

逃げられた。というより興味がなくなったという方が正しいのか。

いや、どちらも正しくないのかもしれない。

「マスター。これでよろしいのですか？」

先ほど遠坂邸から逃げ帰ってきたサーヴァントはマスターに問うた。

マスターはコクリと頷いた。

「しかし、あの大きさといい武器の多様さといいなんなのかしらね  
……」

マスターは呆れたようにため息をついた。

そして、自らのサーヴァントをに憐憫の視線を送る。

自らの運の悪さを呪うかのよう。

「失礼ですがマスター。私はそこまで頼りないでしょうか？」

サーヴァントの問いにそのマスターはあっさりと頷く。

「だってそうじゃない？アサシンなんて諜報が主な役割じゃないのかしら？私自体も戦闘向きとは言えないもの……」

要は同族嫌悪って奴ね。気にしないで。とマスターである間桐已苑は笑う。

已苑はアサシンにこともあろうか諜報ではなく、遠坂邸のサーヴァントの撃破を命じていた。

アサシン自身その要求にはいささか疑問を感じていた。

もしかしたら、マスターはサーヴァントの特性を理解していないのではないのかと勘ぐったほどだ。

しかし、マスターの命令である以上アサシンは少し気乗りしなかったが仕方なく遠坂邸に赴いたのだった。

そこには奇妙な光景が広がっていたのだ。

誰か他のナニかがアーチャーと対峙している。

アサシンはそのナニかを凝視する。

もし敵対するサーヴァントだったならばここで殺してしまえば今後楽になると考えていた。

しかし、どうにもおかしいことにアサシンは気づく。

魔力の流れは感じるがどうにもサーヴァントと言つには語弊がある気がしていた。

かと言ってただの魔術師、いやどこかのマスターだとしてもよりによって敵のサーヴァントの前にみすみす立つなんて馬鹿な真似をするわけがない。

「マスター実は……」

「どうしたのかしら？もしかして、奇妙な人型でも見たのかしら？」

「……！どうしてそれを？」

アサシンの質問に対して巳苑は少し笑うと右腕を自らの眼前に突き出した。

「その人型ってこんな奴じゃなかったかしら？」

そう言うと巳苑の周囲からどこから湧いてきたのか分からないほどの蟲が現れて一つの人型を作る。

アサシンは呆気に取られていた。

先ほど見たのと寸分変わらないモノがそこにはあった。

こうして屋敷で見ると、明るさからか、目を凝らして見れば顔は無いので人間ではないと判別することは出来る。

後ろ姿で判別するのは難しいだろう。背格好なんて巳苑にそっくりだ。

暗闇の中では尚更だ。

なるほど、アサシンはようやく合点がいった。

先程アサシンが話してもいないのにアーチャーの容姿や、武器について知っていたことについて不思議に感じていたのだ。

使い魔を送っているならまだしもそのような気配も感じることもなくあの遠坂邸周辺にはアサシンしかいなかった。

そう疑問に思っていたのだが使い魔として自分の分身を放っていたのだった。

「驚いた？アサシン。これでも私だって魔術師の端くれよ。それもあの人形師から受け継いだ技術と間桐の跡継ぎとして蟲の魔術。その二つを活かせばこんなことだって出来るのよ？」

そう言っただけで巳苑がもう一度右腕をかざすと、巳苑の形をしていた人型は姿を変えあたかもアサシンのような体躯になった。

「一応。動かすことも出来るし戦うことも出来るんだけど、そういうことのために使う気はないわね」

巳苑は、もう飽きたのかパツと手を振ると蟲達は人型を崩してどこかに消えた。

気づくとアサシンと巳苑の周りには蟲など一匹もいなかった。



あれだけの蟲が部屋にいと考えると少し不気味だ。

アサシンは柄にもなく寒気を感じた。

「さて、アサシン。ここで私達の戦略を確認しておきましょうか」

「戦略ですか？」

そう。戦略と巳苑は頷く。

「アサシン。あなたの宝具って射程は広いのかしら？」

「いえ……恐らく相手に触れないと発動しないですね」

「なるほど、必殺の宝具ともなると条件が厳しいのかしらね。まあいいわ。アサシン。とりあえずあなたはさっきの人型と一緒に謀報活動。一応私も見てるから無茶はさせないと思うけれど、殺せると判断した場合は任せるわ」

「了解しました。マスター」

「期待してるわよ？是が非でも聖杯は私達がいただくわよ」

アサシンは今一度頷くと姿を消す。

「自らのサーヴァント位は信じてあげようかしらね……」

アサシンが消えた部屋で巳苑はそう呟く。

巳苑は幼い頃からの調教のせいで人というか他人を信じることで得意ではなかった。

他人の善意は悪意。

忠告は甘言。

そう生きていくしかなかった。

信じる事が出来たのは妹とあの人形師だけだ。

サーヴァントなどと言われているが、アサシンは英霊に数えられる存在である。

英霊とは言わば人間より上の存在と考えてもいいのかもしれない。

そういうモノが間桐巳苑という場末の魔術師に服従するのか。

「まあ、私の得た教訓では物事はそう上手く運ぶはずはないんだけど……」

巳苑は自らの令呪を見る。

大丈夫だ。

例え偽りの共闘関係でも構わない。

本当である必要なんてどこにもない。

願いが叶うならなんでもいい。

この戦争が終わるその日まで。

開幕 ? (後書き)

今日買った oath sign 聞いてますがいいですね。

序幕 ？（前書き）

こんにちは。エーデルフェルト姉妹ってそれぞれ名前あるんですよ  
うかねえ……

## 序幕 ?

305:45:11

「あら、おはようございます姉さん」

妹はたった今起きてきた姉に向かって挨拶をする。

姉の方は寝癖の付いた髪を鬱陶しそうに掻き上げながらおはようと答えた。

姉は席に着くとふと違和感に気づく。

朝食がないのだ。

向かいに座っている妹は自分で作ったであろう朝食を一人黙々と食べていた。

心なしか笑みを浮かべているようにも感じる。

そういうことか。

姉は舌打ちをすると渋々台所に向かい適当に朝食を作る。

昨日エーデルフェルト姉妹の召喚は成功した。

成功したのだ。

とりあえずはサーヴァントを召喚することが出来た。

「「問う。あなたが私のマスターか？」」

召喚陣に現れた影は二つだった。

ここまで露骨なのかと二人は相手のサーヴァントを見て笑ったのを覚えている。

傍から見ても感じる相反する二つの属性。

まさに姉妹と同じ。

善と悪。

姉妹が召喚したサーヴァントも見た目こそ同じだが纏っている空気  
というのかオーラが違っていた。

金髪碧眼。

この戦時中の世の中ではそれだけで目の敵にされそうな風貌。

騎士というのに相応しい鎧。

片方のセイバー腰には鎧が大きくあたかも十字架を模した片手剣。

もう一方には黒くねじれたたおいう表現が正しいような醜い片手剣  
が刺さっていた。

「ええ、私があなたのマスターよセイバー」

姉は片方のセイバーの手を取る。

それにつられて妹ももう一人のセイバーの手を取った。

「さて、私達は四人で聖杯でも取りに行こうかしらね」

姉がそう言うと、セイバーは頷く。

妹の方は、そんなことさも当然であるかように聞き流し自らの寢室に足を進める。

「マスター」

ようやく床に着けたかと思っただ矢先セイバーに話掛けられた。

「何かしら？」

「はい。なぜ私達、いえ私は二人分として召喚されたのでしょうか？」

「そうね……きっと私達二人が二人共マスターになるのに相応しい同等の資格があったからじゃないかしら？」

「しかし、前回までの聖杯戦争においてこのようなことは一度も起きてないですが……」

セイバーの質問に対していい加減面倒になってきたのか妹はぶつきらばうに答える。

「それは前回までに私達みたいな魔術師がいなかったからでしょ。」



ところで、セイバーって姉さんのも  
セイバーだから呼び方が混乱するわね……」

セイバーの方も確かに。と腕を組む。

現界した時に与えられる知識の中にこんな事態を上手く対処出来る  
ような気の利いたものはなかった。

「じゃあ……あなたはセイバーオルタ。とでも呼ぶわ」

「セイバーオルタですか？」

「そ。オルタ。オルタナティブ。うん。即興の割にはよく出来てる  
わ」

自分で考えた名前が気に入ったのかエーデルフェルトはしきりに頷  
いた。

「なら、オルタ。聖杯戦争はもう始まってるわ。寝首をかかれない  
ようにしましょうね」そう言つとエ  
ーデルフェルトは目を閉じた。

そして現在に至るのである。

「ねえ、姉さん？まず最初に誰からいきましようかね？」

妹の質問に、寝起きで頭がうまく働かない割になんとか朝食を作っ  
た姉は振り向く。

「さあね。何か当てはあるのかしらね妹さん？」

姉の方は柔らかな笑みで妹を見つめる。

姉が名前を呼ばずに妹と呼ぶのは自分の方が立場が上であるということ、妹に再確認させるための嫌がらせだ。

「……とりあえず、私達を除く三騎士クラスの奴らを片っぱしから殺してはどうかしら？」

妹はそんな姉の言葉を意に介する様子もなく平然と自らの意見を述べた。

「三騎士クラスが先？アサシン達が先ではなくて？」

姉の方からしたら、妹の発言は意外だった。どうしてそんな面倒なことを先にやろうとするのか。

加えてアサシン達は戦闘能力が低いとはいえ、いや、低いが故にその他の能力が厄介なのだ。

この双子館においてはエーデルフェルトの結界が作動しているから平気とはいえ、屋敷を一步出した瞬間に後ろから寝首をかけられるということもあるのだ。

「不満のようですね。姉さん。私達が得た敵陣営の情報を鑑みるにアサシンとキャスターは放っておいて大丈夫かと」

「どうしてそう言えるのかしら？」

「アサシンのマスターはこの地の魔術師である間桐の家系の者みただけけど、どうにも昨日の晩にいきなりアーチャーに闘いを挑んだらしいわよ。蛮勇もいいところね」

「それで？」

「勝手に死にそうだから無視しようって言うてるのよ姉さん。後はキヤスターだけれど、どうにも情報が集まらなくて未知数。」

流石に挑む気になれないわ。と妹は肩を竦める。

妹の意見を聞いて姉は少し考えるように視線を下にやる。

「まあ、とりあえずあなたの意見を採用するわ」

そう言つと姉はようやくテーブルに着き、自分の作った朝食を口に運ぶ。

眠気覚ましに飲もうと思ったコーヒーは話しているうちに冷めてしまった。たらしくあまり美味しくなかった。

どうにかして不味いコーヒーを飲み干すと姉は自分の部屋に戻った。

「ふう」

ようやく一人だけになれたと安堵して溜息を吐いた。

「どうかされたか？マスター。妹君とはどうにも上手くいっているようには見えないのだが……」

姉は声のした方を向く。

そうだった。セイバーがいたのだ。

「セイバー。もしあなたがあのやりとりを見ても尚、『微笑ましい姉妹ですね』など言おうもんならいきなり令呪の使用を考えると……」

妹の話題を出されるとどっと疲れが出たのか、ぼんやりと窓の外の景色を見ていた。

遠くの方に橋が見える。

姉妹共々日本に来たのは初めてだった。

というより欧州から出たのが初めてだ。

冬木の街のことも知らない。

聞きかじった程度の知識では、こっちの方でも魚を食べるらしい。

他にも色々聞いた気がするがあまり覚えていない。

「ねえ、セイバー」

「なんでしょうか？」

「あなた、もう一人のセイバーとどの程度まで離れて行動出来るのかしら？」

するとセイバーは少し目を閉じた。

何かを考えているのだろうか。

一分もしないうちにセイバーが目を開く。

「恐らく、高低差は分かりかねますが、この屋敷なら別々に、冬木市内ではある程度までは……」

「ある程度って随分曖昧ね」

その言葉にセイバーは申し訳なさそうに目を伏せる。

「申し訳ありません。こんなことは過去に前例がありませんでしたから」

まあ、そうかと納得した。

そんな簡単に双子がどちらもマスターになるのにふさわしい能力を持っているはずがない。

久々に一人で見知らぬ街でも散策してみよかと思ったのだが諦めて二人で行くとするか……。

姉はそう考えると妹を呼びに屋敷の地理的に丁度対になっている妹の部屋をノックした。

「入るわよ」

そう言つてドアノブを開けようとした。

開かない。

鍵をかけている感じはしないので恐らく中で妹がドアノブを回させまいと押さえているのかもしれないなかつた。

「ね、姉さん。要件なら外で伺いますから、少し待つててくれないかしら……」

ドア越しに聞こえる声がどうにも真に迫っていたので姉の方は大人しくドアノブをさっと離した。

ガシャン!!

今まで必死にドアノブを止めていたが、姉が急に離したためドアノブが勢いよく回つてドアが開く。

「あ」

姉の目の前に妹の姿があつた。

「ね、姉さんお待ちせしました。それでなんの用ですか？」

どうにかして妹はその場を取り繕つたが心なしか顔が赤い。

「あ、えーと大丈夫？」

「き、気にしないで……」

「まあいいわ。意外にあんたもドジなのね。それより外に行くわよ？」

「は？」

妹はようやく立ち直ったのか、姉の顔を見つめる。

いい事を思いついたというような顔をしていて気に入らない。

私もこんな顔をしているのだろうか。

そう考えると少し自分に腹が立つ。

「姉さん。ちなみに理由は？」

「決まってるじゃない観光よ。聖杯戦争が始まったとは言えずつと家に籠ってるのも癪じゃない？」

「はあ……」

普通はそうやって作戦を練って確実に勝利を収めるのが普通だと妹の方は考えているのだが、姉は一度決めたら動かないタイプの人間なので、今回はこちらが折れるしかない。

そう妹は考え、渋々頷いた。

「分かりましたよ。行きますから」

渋々姉の申し出を受け入れると、部屋の鍵を閉めた。

「それで何かアテはあるんですか？」

「ないわよ？」

エーデルフェルト姉妹は揃って外出していた。

フィンランドでさえ目を惹いた二人の風貌は極東の大地でも人様の目を惹いた。

というより注目の度合いで言うならばこちらの方が上だろう。

二人は特に視線を委意に介する様子もなく橋に向かって道なりに歩いていく。

「あ」

姉が何かを発見したらしく指をさした。

その指先には何やら釣りをしている人がいた。

妹の方は特に何も感じなかったが、姉にとっては興味を惹いたようでそちらの方向に歩を進めた。

「すみません何か釣れるんですか？」

姉は何も躊躇することなくその釣り人に話しかけた。



一応日本語もある程度操れるから相手にも通じているだろうが、それにしても人見知りをしないというのはなんとも凄いな。と妹は姉を見てそう思った。

「あ？んー。海の漁なら自信あるんだけど、どうもこっちの方はあんまりみたいでそこまで釣れてないんだよ」

ははは。と釣り人は姉の問いに苦笑いをした。

顔を確認すると意外に若そうだ。

もしかしたら同じ年位かもしれない。

先ほど、漁が得意だと言っていたことから漁師か何かだろう。

妹は姉の話相手を冷静に見定めていた。

いつものことながら姉は相手の素性などをまるで意に介さず話しかける。

そのせいか妹の方が相手を観察するのが常になっていた。

今回もその例に洩れず妹がその釣り人を見ていたのだが特に魔術師でも怪しい人間だとも感じなかった  
ので少し安堵する。

まだ、極東の魔術師の情報が少ないため最善手を打つことができないからである。

「お、お嬢さん、随分と美人さんだな。こんな時期に旅行とはお金持ちさんは違うな」

釣り人はそう言って笑った。

ほほ。と姉も上品に笑う。

「まあ、観光というか、少し用事がありましたね」

「ほう、用事か。ちなみにどんな用事なんだ？」

「流石に…それは言えませんわね。申し訳ありませんわ」

だよな。と釣り人は釣り人は何が面白いのか笑みを崩さない。

「ん？もしかしてあんたら最近出来たあのお屋敷の人たちかい？」

「ええ、よく分かりましたね」

「いやな、外国の人が住んでそうだなって思いながら見てたんだよ」

俺の勤も中々捨てたもんじゃないな。と釣り人は姉妹を見て笑った。

勘がいい割には魚先ほどから竿にかかる様子がない。と妹は心中で皮肉を呟く。

「なあ、もし時間あったらこの魚一緒に食べるか？」

釣り人は姉の方ではなく妹の方に向いて呟いた。

どうやら妹がじっと見ていたのを魚が食べたそうだとでも勘違いしたのだろう。

「あ、いえ……」

妹が小さな声で断ると残念だ。と言って顔をしかめる。

「さて、そろそろ釣りも飽きた。というわけで俺は帰るわ」

釣り人は釣り道具を素早くしまつと立ち上がった。

「じゃあな、お嬢さん方。俺の名前は権藤、権藤統一って言うんだ」

差し出された手を姉は握った。

「私は、エーデルフェルトとでも呼んで下さいな」

妹はその手を握らなかった。

そして統一から視線を外す。

統一とエーデルフェルト姉妹は反対方向に歩きだす。

「あ、聞き忘れたんだけど」

統一は振り返ってエーデルフェルト姉妹に訪ねた。

「ここまで来た用事って実は聖杯を手に入れるとかじゃない？」

統一のその言葉は二人に戦慄を走らせた。

「どうして……」

妹の口からそう小さく洩れる。

どうして一般人がそんなことを知っているのか。

答えは簡単だ。

彼は一般人ではないのだ。

魔術師。

この聖杯戦争において倒すべき相手だったのだ。

「改めて、自己紹介をしようか。俺の名前は権藤統一。ライダーのマスターをやっている。今会ったのは偶然だ。不意打ちは本分ではない。だから俺はここで何も見なかったことにして帰る」

そう言うと、統一はエーデルフェルト姉妹に背を向けた。

「じゃあな。もし、聖杯戦争が終わった時にお互いに生きていたら、とびきり旨い魚料理でも食べさせ」

てやるよ」

統一は、その場を後にした。

## 序幕？

304:00:01

「統一。あれで良かったのか？今ならあの二人を何の苦もなく倒せただろうに」

エーデルフェルト姉妹と別れた後、周囲に人がいないことを確認してライダーが実体化して統一に問う。

確かに魔術師として考えるのならば、統一の取った行動は愚かしか言いようがない。

なぜ無防備に近寄ってくる敵を見逃すのか。そしてあまつさえ自分がマスターであることを伝えるのか  
ライダーには理解出来なかった。

「海賊王ともあるうものが、正々堂々の美学も分からないのか？」

統一は意外そうな声を上げたが、考えてみれば海賊は不意打ちで生きるような人種であったと統一は思  
い出す。

「いや、申し訳ないなライダー。しかし、これは言うなれば、お前を信頼しているから出来る芸当だ  
ぞ？」

「ふむ？」

統一の一言が耳に残ったのかライダーはマスターの言葉に耳を傾けた。

「簡単な話で、俺がライダーならば勝てるという自信を持っているからわざわざ手の内を明かしたんだ」

得意気にそう言う統一の顔を見てライダーはふんと鼻を鳴らす。

「なに当たり前のこと言ってるんだよ。ただの漁師の癖に」

違うないそう言って統一は歩を進める。

ライダーには秘密にしておいたがもう一つ理由があったのだ。

確かに、あの場で一人を殺すことは魔術云々を考慮に入れずとも出来ただろう。

しかしそれは、姉妹共々俺のそばまで寄ってきてくれたらばの話だ。

「あの眼……中々の大物な気がするな」

俺と姉から一歩引いて見ていたあの妹の眼が視線が統一に攻撃をためらわせたのだ。

じろじろと見ないように気を配っていたようだが、確実に見られている。統一はそう勘づいていた。

二人とも魔術師。

恐らく姉妹と言うのだから、同系統の魔術を行使するか、はたまた正反対の魔術を行使するだろう。

ともかくそこに対策がとれない以上攻撃は控えるべきだという結論に至ったために会話に興じていたのが真実である。

それに、先程ライダーには正々堂々に勝負するのが理由だからと伝えた。

ライダーが納得したとするならば、どうやら俺は他人から見て正々堂々と勝負を楽しむタイプの人種のように見えるのであろう。

恐らくあの姉妹の二人共、最低でも一人はそう思っているに違いない。

むしろそうでなければ困る。

「ライダー」

統一がそう呼ぶと隣を実体化して歩いていたライダーが首を傾けることなく、返事をする。

「次にあの二人に会った時、お前はあの二人の後ろから攻撃を仕掛ける」

統一の台詞に驚いたのかライダーは一瞬統一の顔を覗いたが統一の横顔を見るとニヤニヤと口を歪め



た。

どうやら、ライダーも自分のマスターはどういう人種なのか認識を改めたようだ。

正直な話正々堂々という言葉嫌いじゃない。

己が力量と相手が力量を試す行為は素晴らしい。

しかし、それは相手が自分と同等、もしくは自分以下の場合に限るのだ。

俄かであるが魔術師になった統二は姉妹と初めて話した時こうも感じていたのだ。

自分とは魔術師としての格が違うと。

統二達はほどなくしてこの冬木の地における宿に着いた。

当然のことだがこの地に知り合いがいるわけでもないので、村の知り合いでこつちに出稼ぎに来ている人の家に居候するという形を取った。

統二が扉を開けようとするとドアがギシギシ軋む音が聞こえる。

正直かなりみすばらしいというか老朽化が顕著な住宅だ。

それでも雨風をしのげる場所があるのは有難いことだ。

「おう。統一か。釣りは上手くいったか？」

家主の問いに統一は今日の戦果を投げる。

魚数匹だった。

「まあ、これだけあれば平気だろ？」

そりゃな。と言って家主は魚を料理し始める。

ここ有家主は統一の子供の頃から知り合いで名を首藤恭平と言う。

恭平も漁を営む家系だったのだが、早くに父を亡くし、母に漁を禁じられ仕方なく冬木の工場で働いている。

普通ならば徴兵されてもいい年頃なのだが恭平は一度結核の疑いがかけられ日本に強制送還されたのだ。

それから現在に至るまで運よく徴兵の赤紙は届いていない。

「今日はどうしたんだ？」

恭平が魚を捌きながら統一に話掛ける。

「どうしたとは？」

「やけに楽しそうな顔してる。そういう時のお前は決まって悪い

ことを思いついてるんだよ」

どうやら旧知の仲の恭平には統一の性格は見破られていたようだ。

統一はまあな。とだけ答えると恭平の目の前に座る。

「これ、何か分かるか？」

そうやって統一は恭平に令呪を見せる。

恭平は統一の手を一瞥すると知らんと答えた。

「そうか……実はな」

そこで統一は経緯を話す。

水神の加護のことを。

聖杯戦争のことを。

話を聞いた後恭平は改めて令呪を触る。

「なるほどなあ。じいさん共の妄言かと思ってたがこうしてその権化があるんじゃないかな。」

というか、じゃあさっきからピリピリと感じてる視線ってのは幽霊でもなんでもなく、その統一が召喚したサーヴァントって認識でいいんだな」

そう言うと恭平はライダーの方を見る。

ライダーは霊体化しているのに場所を見破られたことに驚く。

一般人が霊体の視線などを感じ取ることが出来るのだろうか。

西洋で言う所の悪魔払いなどが悪魔や幽霊を見ることが出来るのと同じようなものなのだろうか。

「ライダー。そんな一般人はこいつ以外に存在しないだろうから気にしなくてもいいぞ」

色々考えていたライダーに向かって、統一はライダーに背を向けたままそう言った。

「こいつはどうも昔から動物的勘というのか第六勘が強い。人間よりもむしろ人間以外の方が見えてるかもしれない」

「流石にそれは言い過ぎだろ。俺だってその…ライダー？だっけか。その人は目つきが悪い女の人にしか見えない」

そう言うと恭平はライダーに向かってほほ笑む。

その双方の眼は少し濁っているとライダーの目には映った。

その眼の濁りがこの世ならざるモノを見据えているのだろうか。

「ところで統一。一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「そこまで話したってことは俺に何かやらせたいってことか？」

「察しが良くて助かる。実はその通りなんだ。俺達が動く日目立つ。街で働いてる時に何か異変を感じたら教えてくれるだけでいい」

「それだけでいいのか？」

「ああ」

意外に頼み事が少なくて驚いたような視線を恭平は統一に送る。

分かった。と一言だけ言うと恭平は魚を調理し終わったのか統一達の前に出す。

「とりあえず、飯にするか」

話を変えるために恭平は敢えて機転を利かせたのか笑顔で統一に語りかける。

「随分と遅い朝食だな」

誰のせいだ誰の。そう恭平が言うと、違いないと統一は笑った。

## 序幕 ?

303:20:11

寝ていたのか。

アダモフは目を覚ました。

この寂れた家の中において眠りを必要とする存在が自分以外に存在しないというのは中々滑稽な様子だ。

薄暗い部屋の中を見回してみてもツアーリの姿は見えなかった。

どこかに出かけているのだろうか。

アダモフは胸元からドロップを取り出すとガリガリと噛み砕く。

昔からの癖でドロップのような類の物を最後まで舐め続けるのは苦手だった。

「ようやく目が覚めたか」

その声にあだモフが目をやると不意に眼前の景色が歪む。

キャスターは自らのマスターを眺めながらやや侮蔑を含んだ視線を送る。

「全くいきなり敵襲があったらどうするつもりじゃったんだ」

幸いなことにここにいる味方は裏切ることしないから平気と言えば平気なんじゃが。

そう言うとキャスターはどこで手に入れたらどうか分からない他所  
行きの外套を羽織る。

「ツァーリこれからどこかに行かれるのですか？」

アダモフの質問に、キャスターは首肯する。

「この地にも教会があったらう？そこに祈りを捧げに行く。お前も来るか？」

ツァーリにそう言われてしまった以上断りづらくなったのでアダモフも外套を着て小屋を出る。

「しかし、実体化したままでよろしいのでしょうか？」

アダモフはキャスターに少し遠慮気味に尋ねる。

戦争真っ只中にあるこの日本の地に置いて外国人が二人も連れだつて歩く姿はどう見ても不自然である。

もしアダモフだってソ連の地にアジア人が二人で歩いていたら不審がるだろう。

もしかしたら敵国のスパイとを考えて射殺してしまうかもしれない。

その問いにキャスターは豪快に笑う。

「構わん。むしろ他のサーヴァントに知らせても良い位だ」

「と仰られますと？」

ふむ。

キャスターは歩いている最中に何かを呟く。

アダモフに聞きとることが出来なかったが恐らく二小節程度の魔術  
だろうか。

「どつじゃ？」

言葉を紡ぎ終わるとキャスターはアダモフの方を見る。

アダモフは自分の体に何か起きたかと体を探るが特に変化は見られ  
ない。

そして辺りを見回す自分の知覚範囲に異変が生じていた。

監視されている？

視線を感じるのだ。

別にスナイパーがアダモフ達を狙っているわけではないのだろう。

感じる圧迫感はごく僅かなものだ。



アダモフは目を閉じてその圧迫感の元を探る。

見つけた。

周囲に何点か魔力の痕跡を感じる。

「この魔力は……」

アダモフは目を開きキャスターを見る。

キャスターはようやく気づいたのかとやや呆れ気味にため息を吐く。

「気づいたか？ 儂らは言わば囷に近いことをやっているのだ。儂らは貴様が先程言った通り目につく。

逆に考えれば他のマスターからは狙いにくい存在だろう。魔術師風情というのはどうにもコソコソ秘密裏にことを行う癖があるからな。

まあ、万が一に不審な人物がいたら逆に儂が生み出した兵を使って攻撃すればいい話だ。

射撃の方先日貴様に見せて貰った銃をモデルにしておる。ついでにお前の魔力でも操作が出来るようにしておいたから何かを感じ取ったら容赦なく狙え」

アダモフはキャスターの作戦に感嘆し、敬意の念を示す。

「流石です。ツァーリ。一瞬でも疑った私をお許してください」

アダモフが恭しく頭を下げるとキヤスターは一笑に伏した。

「良い。今、僕は気分が良い。それに軽々しくマスターを殺してしまつてはそもそも僕が現界出来ぬ」

キヤスターの作戦が功を奏したのか、はたまた意外と外国人が二人並んでいるというのも陳腐な光景だつたのか何も起きることなく教会に着く。

確か聖堂教会は中立地帯だつたはずなのだが平気なのだろうか。

案の定神父に嫌な顔をされたがアダモフ達は特に気にすることもなく祈りを捧げる。

アダモフは神に祈るということを放棄していた。

神は何も助けてくれない。

それは先の闘いで理解していた。

目を閉じるといつも思い出す。

何一つ父親らしいことをしてくれなかった父の顔を。

父は魔術師だつた。

自分は魔術師の家系に生まれたことを誇りに思い、一人息子のアダモフに魔術の全てを教え込んだ。

両肩の魔術刻印はその証だ。

アダモフはそのせいか魔術を毛嫌いしていた。

行使するのにも痛みを伴い、こんなもの使えて何になるのか。そう考えることもしばしばあった。

アダモフは魔術などよりもたまたまに友人と行う獵の方が数倍興味があった。

得物を見つけ、動きを予想し見事仕留めた時の快感はチェスや詰め将棋で相手を封殺した時の感覚と似ていた。

そのせいか射撃の精度は友人を遥かに超え名手と呼ばれる域までに達していた。

一方、魔術の方は本人が使用する気がなかった。

なので余り才能がなかったのかははたまたまた開花していないのか不明である。

しかし、気配というより自らの存在そのものを相手に知覚させないという魔術はそれなりに得手であった。

だが、それでさえ滅多に使うことなく戦争の道を歩いてきたのだ。

アダモフは自身に令呪が宿った時、厄介なモノを背負いこんでしまったと感じていた。

聖痕なんて自分には必要ない。

そう悪態を吐いたほどだ。

他にも魔術師と名乗る人間は沢山いるのにどうして自分なのだ。

アダモフは魔術を毛嫌いしていたが、魔術は彼を愛していたのだ。

仕方なく父の遺した蔵書に手をかけ聖杯戦争という存在を知る。

父の手記を眺めていると封筒が柔のように挟まれていたらしくパサリと封筒が落ちる。

父の最期は見るに堪えなかった。

自活もおぼつかず、全てを家族に頼り切っていた。

その癖にプライドだけは一人前で何かあると家族に怒鳴り散らす。

だからアダモフは断罪した。

最初の殺人は身内だった。

硝煙の臭いは今でも忘れられない。

そして、死に際の父がなぜアダモフを見て微笑んだのかアダモフは理解出来なかった。

アダモフは何気なくその封筒の中身を開く。

封筒の中身は普通の便せんが数枚入っていた。

恐らく気をやってしまった前に書いたのだろう。

所々文字に乱れがあるものの別段変わり映えのしない手紙だった。

謝罪と恐怖の手紙だった。

日に日に自分が自分でない誰かに乗っ取られていくような錯覚。

それから自分が乗っ取られた後に家族に迷惑をかけるだろうという謝罪。

それからそれから……

アダモフは自分が読んでいた便せんが所々湿っているのに気づいた。

自らの頬を手で触れる。

温かい。

こんな液体がまだ自分に流れていたのかと驚嘆した。

アダモフはその手紙をそっと封筒にしまつと母の墓前にそっと置いた。

腹水盆に帰らず。

過ぎた時は帰らない。

それこそ奇跡が起きぬ限りは。

「奇跡……」

そこでアダモフは、ハツとして父の蔵書のあるページを開く。

あつた。

奇跡を起こす万能の願望機聖杯。

自らの右手を見る。

令呪がある。

アダモフは、聖杯に選ばれたのだ。

もし聖杯に何を望む？と問われたらきつとアダモフは嘲笑を持ってこう答える。

幸せだった家庭と。

祖国が世界を征服するという願いも父の悲願を叶えるという意味では悪くない。

しかし、それはほどなくして実現するだろう。

実現する願いをわざわざ奇跡を用いて実現する必要は無い。

人様に話せば夢が小さいと嗤われること間違いない。

そう言われたならば嗤う奴らに向かってアダモフはこう答えるに違いない。

「過去を変えろということとは未来をひいては世界を変えるのだ。奇跡に相応しい所業じゃないか」

と。

「随分と長い祈りだなアダモフ」

その声でようやく我に返ったアダモフは辺りを見回す。

そっだ。

今は聖堂教会にて祈りを捧げている最中であつた。

キャスターの方はもう終わったようである教会の中にあつた手短な椅子に腰かけている。

「貴様が眠っておる間に神父に話つけた。祈り程度ならば構わないということだ」

キャスターはそう言つと椅子から体を起こす。

「次はどちらへ？」

「ふむ。とりあえず現世に来てからまだ何も手に掛けておらぬ。手始めに得物を探すでしょう」

まだ、この時代の人間の強度が分からないのでな。

そう言つとキャスターとアダモフは聖堂教会を後にした。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3951y/>

---

fatexx3 第三次聖杯戦争

2011年11月29日02時47分発行